

2013年8月15日

「神戸空襲の碑」除幕式に参加しました

千葉市空襲と戦争を語る会 伊藤章夫

神戸空襲を記録する会の中田政子代表から式典参列を要請されたので、語る会を代表して伊藤が8月15日、神戸市中央区の大倉山公園における式典に参列しました。当日は暑い日差しにもかかわらず、第2会場や救護所、臨時トイレも設けられたテントの張られた会場の700用意された席がほぼ埋まりました。私は前列に指定席があり市長、空襲傷害者、中田政子さん、作詞家、地域労働組合、市職員労働組合、市教職員組合、京都の会代表らと並ばせていただきました。10時に開会しました。インターネットには各紙の記事が掲載されています。是非一読してください。



中田政子代表は、1971年に会が発足して42年が経過した。どうして名前なの？と聞かれます。何人亡くなったかも正確にわからない。名前にして一人ひとりの人生があったのだ。お名前の4文字から6文字の向こうに生まれた命がある。想像してほしい。性がわからない呼び名の「よっちゃん」「大工の棟梁」から想像してほしい。無残に死んでいった人々、母親、子供。愛する神戸と日本に再び戦禍に見舞われることのないように願います。矢田市長へ高い所からお礼申し上げます、と述べた。

矢田立郎市長は、想いを後世に残す風習が日本にある。神戸空襲を子どもたちへ伝えて行く活動。2月24日、3月17日、5月11日、6月5日、8月6日の神戸空襲、少年Hの映画の映像を通じて見られる。街は崩壊した。平和と繁栄は彼らの犠牲の上に立っていること



は忘れられない。ここは戦中、高射砲陣地があった小高い丘の上である。悲しみをしっかり受け止め、世界の恒久平和に貢献したい。私も空襲犠牲者だ。6月5日朝の空襲は爆弾が落ちると煤煙や粉塵によって夜のように暗くなった。やがて周りが火の海になった。防空壕を出て火の海を通過して避難した。死体を運び出す大八車で死体を数体ずつ東灘小学校の防空壕に埋めた、まだ骨が残っていると述べた。

神戸YMCA名誉顧問の今井鎮雄さんは、上海で終戦を迎えた。陛下の放送を聞いて切腹した人もいた。若い人が死んだら、誰が国を作るのだ。腹を切った人は痛いといったが当たり前だ。神戸空襲は帰国してから聞いた。海軍航空隊の将校であった。来襲に備えて、いつ死んでもいいように下着を洗濯して着ていた。戦後、残りの人生を戦争から命を伸ばしていただいた。みんなが生きて行くにはどうするか。食べ物を分かち合う、生協活動を始めた。子どもたちや青年たちに戦争をさせない。



共に生きてゆく。死ぬことは怖くなくなった。どの時に死ぬのが幸せか。政府の最近の動き、もう一度考えなくてはならない。恨みを持つのではなくて分かち合うことが大切だ。これだけの人が空襲のことを、苦しい悲しいことを覚えていらっしやる顔を見てよかった。いい世界を作ろう。お互いに仲良く。40年つなげた中田さんに感謝したい。仲間がたくさんできたと述べた。

県立長田高校の音楽部が「バックミラーに見る街 神戸大空襲をうたう」の一部を混声合唱と演奏で披露してくれました。この歌は、1983年に神戸空襲のために作られた組曲で、会ではずっと歌い続けられた曲です。

閉会のあいさつで、杉田哲さんは「この会を続けて行こう」と訴えました。

慰霊碑の状況を述べます。表面には「神戸空襲を忘れない／いのちと平和の碑」と題字ある。碑文は「・・・8000人をこえる市民が亡くなられ・・・ここに私たちは、世界平和を願い、空襲死没者の名簿を収集し、お名前を記した碑を建立しました。」と結んでいる。裏側に50音順で1738名（不完全な氏名を含める）の刻銘板がある。市長の名前はない。

